

とき、予想通り父は倒産。神戸で一からやり直す
ことになり、最終的に電信電話工事渡辺組を設立
した。私の戦後は終わっていなかった。

私の満州・十三歳の思い出

大阪府 丹生 幸美

プロローグ

満州の大地

短い春と秋……アカシアの並木道

赤土の露出した山々

春……山腹に咲き乱れるアズノ花

夏……真夏の太陽は強く、青空の晴天続き

秋……高粱畑の穂をわたる冷風

冬……ペチカで鳴くコオロギの子守歌

煉瓦の家の軒に太く長い氷柱

スケートに夢中になった長い冬

豊かな自然、そして厳しい自然

広い大陸で育まれた私の子供時代

その故郷！ 満州は！

今も私の心の中に脈打っている

日本の敗戦

あの幸せも昭和二十年八月十五日で消えた
そして激動の時代

ソ連軍・八路軍そして国府軍

生と死の谷間をかいぐり

満州への限りなき思いを胸に秘め

無蓋車に詰め込まれトンネルを通り

索漠たる広野の落日に涙し

さつま芋の葉の汁をすすり

高粱の粥を食べながら

重く疲れた足を一歩一歩祖国へ向けた

すべての財を捨てリュックサック一つを肩に

耐えてきた者たちの耐えた力が行く

働きの引揚げ

あの引揚げの記憶は

私がこの世と別れる日まで

私の肺腑へ染み込んで離れないだろう

ポプラ・アカシア・アンズの花よ

地平線に沈む雄大な太陽よ

私の心の故郷よ

私の失われし故郷よ

海の向こうの異国の故郷よ

空の向こうの異国の故郷よ

一 瀋陽を訪ねて

昭和六十二（一九八七）年の夏、小学校時代の
恩師御夫妻、そして同級生八人、近所の幼なじみ、
それに加えて諸先輩などの人々と共に、中国東北
部瀋陽の飛行場に降り立った。

第十次訪中団の一行三十四人である。飛行場か
らバスですぐ本溪湖に向かった。

四十一年ぶりの生まれ故郷への訪問である。万
感胸に迫ったあの感動は、いつになっても新鮮で
忘れることができない。昨日のことのようである。
同行した同級生のうち、幼稚園から一緒だった者
五人、子供時代の思い出がいっぱいに詰まってい
る訪溪であった。

「幾年の夢を手取る雲の峰」

私たちが訪溪したときは、本溪湖の街は昔のま
まの本溪湖であった。子供のころに遊んだ缶蹴り

の陣地であった、満鉄のマークの入った鉄製のマンホールの蓋を、我が家であった所の近くで見つけて、幼なじみのY子ちゃんと一緒に狂喜したのだった。小学校も、女学校もそのままだった。思いもかけなかったが。私の家もそのままだった。

何よりも感激したことは、公会堂近くの路上で七十歳ぐらいのおじいさんに会ったが、そのおじいさんが私の生家の「大塚商店」を覚えていて、私の亡き祖母や父母のことを日本語で話してくれたことであった。また、昔無尽会社でボーイさんをしていたという人から声を掛けられた。新聞販売店をしていたY子ちゃんのおじいさん、写真館を経営していたH子ちゃんのお父さん、そして私の父の名前をはっきり覚えていてくれたのには本当に驚き、そして感激したものだ。その感激の最たるものは、子供のころに一緒に遊んだことのある、近所の洋服屋の息子さんに会ってY子ちゃん、私と四人並んで記念写真を撮ったことである。このことだけでも、本溪湖を訪問した価値が

十二分にあった。

本溪湖の太子河は以前と変わることなく滔々として流れ、ラクダ山、本多山、平頂山は昔のままにそびえ、自然は昔のまま、そして中国の人々の心も昔のままだった。私は、このことを本溪湖をこよなく愛した亡き祖母や父に報告した。

「凌辱の夏陽が沈む地平線」

二 私の生い立ち

私の生まれ育った所は、現在の中国東北遼寧省瀋陽の近くの本溪市、旧満州国奉天省本溪県本溪市「黒く燃える町」と言われた炭鉱と製鉄所のある町であった。

私の家は日露戦争の直後、徳島の田舎の家が没落、左前になり、曾祖父が一旗揚げるべく単身大陸に渡り、ハルビンから大連、そして祖父の代には、本溪湖で商売を始め、満鉄などに物品を納入し、財を築いたそうである。私の亡父も、満州生まれで本溪湖小学校、そして長春商業学校の卒業生である。

私は、昭和六年十一月二十日、満州事変の最中に本溪湖駅前の「大塚商店」の長女として生まれた。私の幼年時代は、広大な土地と大らかな環境の中で、何一つ不自由なく、伸び伸びと育った。

戦時中でも、内地に比べて満州はのんびりしていたと思う。小学校五年の修学旅行は、旅順・大連に、小学校六年の修学旅行では、新京（長春）・ハルビンへの大旅行ができた。

昭和十九年四月、本溪湖女学校に入学、戦時色は濃くなってきたが、一年のときはまだ授業が続けられていた。

三 昭和二十年のソ連参戦まで

昭和二十年になると、雲行きがおかしくなってきた。女学校二年になると、学業は有名無実。報国農場での農作業、校庭の隅の防空壕掘り、そして一・二年生は町の製鉄所へ、三・四年生の先輩たちには、遠く離れた遼陽の軍需工場への動員令が下り、出発して行った。でも私たちは、日本の勝利を信じ、大和撫子・銃後の乙女として、「撃

ちてし止まむ」「欲しがりません勝つまでは」を合い言葉に黙々と働いていた。

「疑うことを知らぬ夏空乙女たち」

そのころには四十歳ぐらまでの男という男に、軒並み召集令状がきた。四十に近い私の父にも、五月始め赤紙が届けられた。

戦後になって聞いたことだが、そのころ大日本帝国の精鋭部隊であった八十万の関東軍は南方へ、沖縄へ、そして本土上陸に備えて、移動がなされ、その穴埋めに満州在住の日本人男子の根こそぎ動員が行われたのである。そしてその大多数は、戦後ソ連へ抑留され、シベリアへ送られ、苦難の道をたどったのである。近所の小父さんや友人の父上たちもシベリアで無念の死を遂げられた方がいる。

そのころ、ソ満国境の各地にソ連軍が続々と集結していたが、一般大衆は、何も知らずただ一筋に日本の勝利を信じていた。

私の母は、末妹を出産後、結核性腹膜炎にかか

り三年ほど内地へ療養に帰っていたが、父の応召で祖母と子供たちだけになった私たちの所へ小康を得ていた母は、三歳になった末妹を連れて必死の思いで帰満した。そのとき、一緒について来てくれた母方の祖母はすぐに内地へ引き返したが、無事に日本へ帰れたかどうか不明だった。しかし幸いなことに、機雷を避けながら舞鶴港に上陸し徳島へ帰り着いたことを、引き揚げてから聞いた。そのころには、満州でも汽車の切符はなかなか手に入らなかったが、守備隊に物資を入れていた関係でやっと入手できたのであった。母の帰満の折に送った荷物は、何も着かず行方不明になった。

母の帰満は、父の出征にはもちろん間に合わなかった。母は今生の別れになるかもしれないと、牡丹江からさらに奥の虎林というソ満国境近くにいた父に面会に行った。これもあとで聞いたことだが、四十歳近い父たち召集兵に渡された物は、水を入れる竹筒と竹の剣であったという。そ

のとき父は「これでは日本も終わりだなあ？」と思っただけである。そしてこの面会の後、父の部隊は朝鮮へ向かって移動したが、敗戦が分かった時点で、部隊長の英断により部隊は現地で解散した。そのお陰で父は戦死もせず捕虜にもならず、敗戦後十日ほどかかって私たち家族の許へ帰ってくれたのである。

四 八月八日から八月十五日へ

八月八日、ソ連邦が日本に宣戦布告をした。夜半から起こったソ連軍の攻撃によって、王道楽土と言われていた満州の地は、一変して戦場と化したのである。翌日より、ソ連機の来襲が始まった。そしてソ満国境を突破したソ連の戦車部隊が、続々満州の平野に侵入して来たのである。敗戦の日まで現地召集は続き、女学校の先生も、六十歳に近い教頭先生以外の男の先生も皆召集されて行ったが、私たちはまだ日本の勝利を信じ、もしもソ連軍がやって来たら、最後の一人になっても御国のために戦う覚悟であった。

ソ連参戦後から、二、三日経った早朝、祖母が店を開けると、両親が仲人をして北満の小学校へ転勤されたＴ先生の奥さんが、体の前に男の赤ちゃんを抱え背中にはリュックサックを背負い、真っ黒に埃で汚れた顔で泣きながら飛び込んで来られた。御主人の先生は現地召集で出征され、ソ連軍の参戦で命からがら逃げて来られたのだった。

八月八日以後、私たちは勤労働員の間、北満方面から着の身着のままの姿で、貨車に鈴なりになって南下している避難民の人々への炊き出しを当番制で行っていた。八月十五日の正午も、私は同級生と共に駅頭で炊き出しをしていた。お昼を過ぎて学校に戻って来ると、「日本が戦争に負けました！」と言っている。私たちは一瞬耳を疑った。小学校でも女学校でも「日本は神国です！小国民は！銃後の乙女は！どのような辛苦にも耐えて頑張るのです！」と教えられてきた。その信ずべき先生から、涙ながらに「日本は戦争に負けました。正午に天皇陛下の玉音放送がありました。

危険ですから、すぐ自宅に帰るように」と言われ、私たちは呆然として友と手を取りあい、泣きながら帰宅した。当日は、確か猛暑晴天で空には雲もなく、全身を包んでいた国防色の長袖、もんぺ、防空頭巾、今思えばどんなに暑かったことか、よく着ていたものだと思うが、暑さを感じた記憶は残っていない。

敗戦と同時に、満州国は解体され、我々は一夜にして異国に捨てられ、敗残者の群れと化したのである。

「リヤカーが引つ張ってきた八月十五日」

「同じ日の同じ時刻の酷暑かな」

五 敗戦から引揚げまで

ソ連軍が、国境の開拓団村を殺戮しながら南下しているということだった。各地で中国人が日本人を襲ったり、難民の群が身内を殺し子売り、食べ物乞いながら南下して来るといふことも伝わってきた。

九月に入ると、私たちの街にもソ連軍がやって

来た。「大鼻子（ターピズ）が来た！」と言い、女の人たちは頭を坊主にして隠れて暮らした。満州にやって来たのはシベリアの囚人部隊で、知的能力も低かったようである。女の人を襲ったり、時計を盗って腕に三つも四つもつけて喜んでいたら、私たちの街では、製鉄所などの施設の解体撤去が終わるとソ連軍は立ち去り、今度は中国共産党八路軍がやって来た。軍隊の規律は厳しく、ソ連軍のような無秩序な心配はなくなったが、民衆裁判が始まった。元日本軍の憲兵隊長や警察署長など、次々と多くの日本人が人民裁判にかけられ、銃殺されていった。私の同級生の父上も、税務署長をされていた方や、捕虜収容所長をされていた方が銃殺された。この方々は、言うならば巷の庶民の長に過ぎない。特に気の毒だったのは、北支からの病院部隊が内地に向かって移動している途中で、私たちの街で足止めになった。引率責任者だった奥医学博士の病院部隊長が銃殺され、一緒だった奥様と二人の娘さんは、見知らぬ土地で食べるもの

にも困り、引き揚げるまで大変な苦勞をされた。私の父も商売を手広くしていたので、「人民の利益を搾取した罪」ということで牢に繋がれた。私は毎日弁当の差し入れに行き、監視の八路兵と仲良くなり、なんとか片言の中国語で話をしては父の安否を確認する毎日であった。小学生の弟は、駅前の人裁判の度に父を心配して覗きに行っていた。父は、民衆から暴利を取ったという罪で財産は没収されたが、命だけは助けられた。その結果我が住宅は没収されて、追い出された。やっと与えられた住まいは三畳に土間だけの家で、結局家族六人が引揚げまでそこで暮らした。私は、毎日支那街へ饅頭を売りに行って稼いだ。そうこうしている間に、蔣介石の国民政府軍と八路軍との間で市街戦が始まり、国府軍が勝って八路軍の敗走が始まった。このとき、八路軍の使役人夫や野戦病院の看護婦として、私の同級生や先輩たち、幾人かが敗走する八路軍に連れ去られ、その後何年か八路軍と行動を共にする結果となり、

大変な苦勞をしたそうである。

八月十五日から、蒋介石軍が進駐してくる間に、満州の冬が訪れる。満州の冬は、南満でも零下二十〜三十度になる。経験した者でないとは分らないと思うが、その寒さは凄いなものだ。私たちが小さいころ、通学路などであまりの冷たさに泣きながら歩くと、まつげが凍ってまばたきができなくなったり、スケート靴の紐にちよつとでも水がつき濡れていると、凍りついた紐が解けず、靴は脱げず、あまりの冷たさに泣いたこともある。その寒さと飢えの中で、特に悲惨だったのはソ満国境周辺からの避難民であつた。東満国境から奉天までの約六十キロメートルを、半年以上かかつて歩いて来た人たちに与えられた配給の食糧は、一日一椀の高梁のお粥、馬鈴薯一個、小さい乾パン六個だったという。奉天の春日小学校の校庭には、千体以上の日本人の遺体が沢庵漬けのように穴の中に埋められていた。

厚生省援護局の資料によると、昭和二十年九月

二十四日に、日本外務省が在外機関に打電した電文は「居留民はできる限り現地に定着せしめる方針をとるように……」とある。敗戦という極限の状況にせよ、日本外務省は無情に思える。米極東総司令部は、「一般日本人の送還については総司令部の義務ではない」と言っている。敗戦後、満州と内地との連絡は全く途絶えて、内地の状況は一切知る由もなかった。

「昭和とは生きることなり姫辛夷」

六 祖国へ向かう

旧満州地域から引揚げは、約百万人、すべて葫蘆島経由で帰国した。

在満同胞のすべてが、その軽重はあつたが、敗戦の日から「死は易く生は難し」の厳しい日々を送った。そしてどんなことがあつても、一日でも長く生き延びなければならぬことを、自然に会得した。巨万の富も未来の雄図も、すべてを捨てて母国に帰還することより他に道はないと悟らざるを得なかった。

冬が去り、昭和二十一年五月から引揚げが始まった。私たち一家は、九月の第九次の引揚げであった。曾祖父の代から四十年余り、営々と築きあげた財……「五十軒ほどの借家」「住み慣れた家」「手広くやっていた商売」「満銀に預けていた預金」等々すべての財産を放棄しなければならなかった。一人千円と、自分で持ち運びできる所持品はリュックサックに詰めて背負えるだけの量（その半分は食糧であった）を持ち、生まれ育ち暮らした本溪湖の地を後にした。

両親は何とかして少しでも財産になるものをと、苦勞して小麦粉に金塊を練り入れて花林糖を作り、日本に持ち帰る算段をしていたのだが、金属類は探知機で探し、禁制品が見つかると思う全部引揚げができなくなるといふわさが流れ、両親は持ち帰るのを諦めたようであった。写真も駄目だと聞いたが、私は恐れずに自分が写っている思い出の写真、何枚もリュックサックの底に忍ばせたが、何事もなく日本へ持ち帰り、私の宝物になっていた。

る。満州時代の友人たちにも複写してあげ、とても喜ばれた。本溪湖から奉天鉄西の収容所、錦州の収容所、いずれも土間に一枚のアンペラを敷いて、家族が詰め合い並んで寝た。

「ひもじさの莫塵一枚や敗戦忌」

移動の汽車は貨物の無蓋車で、ぎゅうぎゅうに詰め込まれ、トイレは列車の隅に置かれたバケツだった。弟が子供のころ、引揚げの話になると「姉ちゃん、バケツにおしっこやうんこをしたね」と必ず言っていたのが思い出される。

奉天から錦州に向かう折り、一晩中豪雨に遭い全身ずぶ濡れ、無蓋車は水浸しになり、私たちは腰まで水に浸かった。

錦州の収容所では銃を肩にした中国の監視兵が、引揚者の荷物を銃剣の先でつついて、「中を見せろ」と言い、拒めば当然切っ先はプスリと胸に突き刺されるかもしれない。白羽の矢を立てられた人は、リュックサックの紐を解いた。すると、荷物の中から出てきた懐中時計を取り出して、ニヤ

りとしてその場を立ち去って行った。

母には、夜通しの豪雨が病後の体には厳しかったのであろうか、錦州の収容所で高熱に襲われた。四十度近い高熱でも葉一つ無く、収容所の端にある井戸に行つては、水をくんで来て冷やすことしかできなかつた。夜中の十二時ごろだったか水をくみに行くと、同級生のIさんが泣きながら水をくんでいた。声を掛けると、父上が息をひきとり、末期の水をくみに来たということだった。彼女の父上は、この収容所の片隅にそのままの姿で埋められた。Kさんの母上は引き揚げて来てから「何とか生きている間にお父さんの眠っている錦州の地を訪ねたい」と言い続けていられたそうだが、果たせずに亡くなった。後年、Kさんは亡き母上の思いを胸に、第十次訪中団の一人として私たちと一緒に本溪湖を訪れ、錦州にも足を伸ばすつもりだったが、単独行動ができず、錦州と土地続きの本溪湖の地で訪中団の団長だった同級生で僧侶のF君が、お経を上げてくれてお父さんの供養を

した。

「繚乱のカンナが燃えて末期水」

「墓碑みな故郷に向きしえごの花」

錦州収容所の診療所長さんが、たまたま両親と同郷の宮の原病院の院長さんで、私宅にもよく遊びに来られていたE先生であった。母のために、手に入りにくい注射を打っていたことができ、E先生のお陰で母は命を取り止めたが、足腰が立たなくなった。さらに満州を墳墓の地と決めて、半生を商売に全精力を注いだ祖母も、すっかり気落ちして食事（といっても高粱粥と薩摩芋の葉汁のみだったが）をほとんど摂らず、乗船のときには全く歩けなくなっていた。

「凛々と祖母の履歴書敗戦忌」

葫蘆島の埠頭には、日の丸が翻っていた。大人たちは涙を流していたが、私は弟と二人で中国人が売っていた豚饅頭のおいの前で空腹を我慢し、いつまでも立っていた。飽食の時代と言われる今でも、あのおいは昨日のように思い出される。

「芋蔓をホツホツかみしめ生きました」

「今日生きて佃煮にする芋の蔓」

収容所で一緒になった同級生の何人かと、日本の本籍地をお互いにメモにして交換した。これが、日本に帰ってから友人たちの消息を知るのに役立つた。私たちは涙ながらに手を振り、いつの日にかの再会を誓った。

母と祖母は、担架に乗せられての乗船で、父が付き添った。私は八歳の弟と三歳の妹を連れて、三人で乗船した。船が満州の地を離れるとき、何を思ったかは不思議にも覚えていない。ただ私の手を、しっかりと握りしめていた三歳の妹の不安そうな顔だけが、鮮明に脳裏に残っている。船中で亡くなった人たちは、毛布に包んで船尾から海中に沈め水葬にした。

「飛魚翔んで水葬喇叭海の渦」

七 故国の土を踏む

本溪湖を出発して二カ月余り、やっと佐世保の港に着いたが、上陸手続きの終わるまで数日間、

港外に停泊させられやっと接岸して、検便、DD T散布を受けて、ようやく故国の土を踏んだ。後年西宮で、阪神大震災に遭った満州時代の同級生Aさんが「一週間ほどお風呂には入れなかったが、引揚げのときの何カ月も入れなかったのに比べればね……」と平然と言っていた。今思えば、引揚げのときは毎日の洗顔も十分にできなかったような気がする。人間というものは、いざとなればいろいろなことに耐えることができるものだ。Aさんは、震災で倒壊した屋敷跡に、引揚者の根性で立派な家を、六十歳を過ぎて建て直したが、残念なことに十年ほど住まわれて急逝され、ご主人も一年後に亡くなられ、家は空き家になってしまった。

佐世保から四国高松まで、何とかたどり着いた。祖母と母は歩くだけがやっとなので、父と私が二個のリュックサック、弟と小さい妹にもリュックサックを背負わせ、必死の思いでここまで持ち帰ったが、高松栈橋でなけなしのお金で赤帽さんに

預けた二個が、手違いでほかの引揚者に渡り、赤帽さんも必死に探してくれたのだが返ってこなかった。それまではどんなことがあっても泣かなかった私の目から、止めどなく涙が流れた。

祖母は、郷里の四国徳島へやと帰り着いて三日目に、白いご飯を一口食べただけで、栄養失調で亡くなった。

「矜持たる祖母の骨鳴る盆の月」

錦州で命をとり止めた母も、引揚げてから苦労を重ねた後、これからやと豊かに暮らせる日本の繁栄を目前にして、四十九歳の若さでこの世を去った。四十九歳……母の年を越したとき、私は私の命に感謝し、その幸せを噛みしめた。

八 自立・再建

引揚げ後、苦勞した母は「女も自立する力が必要、お金はないが、自分の力で大学に行きなさい」と言った。私は徳島の田舎の高校を卒業して京都の大学に入り、奨学資金とアルバイトで学資と生活費を稼ぎ何とか卒業をして、教師になって三十

七年勤め、平成四（一九九二）年に退職した。在職時、九州への修学旅行で、長崎方面に行き、バスで佐世保の辺りを通るときには、あの引揚げをいつも思い出した。「国敗れて山河あり」「人生至る所に青山あり」と感懐ひとしお。そして、不幸にして日本の土を踏めなかった人たちの冥福を、そつと祈った。

満州をこよなく愛した父、父は晩年、生活が落ち着いてからは、満州時代の方々を、日本全国津々浦々に訪ね、本溪湖会が発足したことを喜び必ず出席していたが、昭和四十九年に亡くなったので、日中国交回復もまだで訪溪できる時代が来るとは思ってもいなかったことだろう。存命ならば、訪中が実現した折には真つ先に参加したと確信する。

私が共働きでやと四十歳になったとき家を建てたが、父曰く「お前もよう頑張って立派な家を建てたが、これからもう一軒家を建てられるかな！ わしは四十歳のとき、裸一貫で引揚げて来

て何もないところから大阪で工場や家を建てたのやから……」私はこの言葉に脱帽した。明治生まれ、満州生まれの父の生きざまを感じたのである。今になると、父からもっと本溪湖のことを聞いておけば良かったと思う。ちなみに、父の葬儀委員長は長春商業学校時代の友人がして下さった。本溪湖に来たことのある従兄弟たちも亡くなり、一緒に引揚げた弟も亡くなった。当時三歳だった妹は、何も覚えていないそうだ。

「反故にしてならぬ記憶や夏の章」

エピローグ

満州事変以来の戦争は、その理由はともあれ全国民を引きずり込み、その渦中に巻き込んだが結果的には敗戦という憂き目となった。そのために海外に進出していた日本人は取り残され、悲惨な引揚げとなったのである。その人たちは、みんなそれぞれの地に根を下ろし、骨を埋める覚悟でいたのである。

それが、国と民族の一大転換から、すべての望

みが絶たれ、ただ一筋に故国を目指す民族の大移動となった。そしてそれらの人々の直面した運命の深刻さは、それまでの世界戦史の中でも類例のない悲劇を生んだのである。この引揚げは、一般邦人のみが背負って、悲惨な状況の下に行われ、その中で中国残留孤児を生んだのである。北朝鮮拉致問題が、近年盛んに取り上げられているが、中国残留孤児問題は、悲惨さや人数などから見てもそれ以上のものだと思っている。

私たち生き残った小学校・中学校・女学校時代の仲間、引揚げ後二十年くらい経って、一人また一人と住所を探し合って同窓会を結成した。結成以来、三十年の歴史を持つ溪中・溪女同窓会も平成十二年の六月、箱根での同窓会を終止符として事実上の解散となった。

しかし、溪中三期・溪女四期の同期会はその後も続き、今年も九州在住幹事の方々のお世話で、長崎雲仙で二泊三日の同期会が開かれた。北は北海道、南は鹿児島と日本全国から二十八人が集ま

った。七十歳台になっても、年に一度は集まって生きていることを確かめ合う。皆会うたびに子供のころの愛称で呼び合い、本溪湖の話を繰り返している。幼いときの思い出や引揚げの話もしている。子供のころのセピア色の写真を見ながら、良き時代をしのび合う。人生の年輪に関係なく、幼いころの故郷に母校が存在しないという傷心を持ち続けねばなるまい。私たち同窓生は、決して「終戦」とは言わない。それは「敗戦」なのである。

「友ありて歳月を負う夏館」

最近子供たちのいろいろな事件を聞くたびに、広大な土地と大らかな環境の中で、伸び伸びと育った私の幼少時代を、ときに触れ思い出している。物が巷にあふれる豊かな時代であるが、中東では戦争が続き、世相を眺めると何となく不安な気になる。

私たち、昭和一桁世代がこの世を去れば、もはや満州を、敗戦を、引揚げを語る人たちはいなくなるであろう。引揚げ体験を通して、戦争の悲惨

さや平和の尊さを後世に伝え続けよう……死ぬ日まで。

私は、私の子供や孫、そして教え子たちをはじめ、世の人々の幸せを心から願って止まない。